ボランティア続々

熊本地震 発生1週間

益城 受け入れ開始

熊本地震は21日、発生から1週間を迎えた。被災地ではインフラの復旧作業が徐々に進むが、依然として約9万人が避難生活を送っている。毎日新聞の集計では、死者48人の他、エコノミークラス症候群などによる震災関連死が疑われるケースも10人を数えている。また、安否不明者2人の捜索は21日、雨のため捜索が一時中断された。最も多くの犠牲者が出た熊本県益城町ではボランティアの受け付けが始まり、激しい雨の中を各地から駆け付けた人たちが登録手続きをした。

（2、3、8、9面に関連記事）

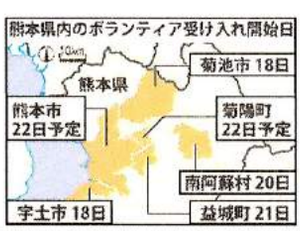
ボランティアの受け付けが始まり説明を聞く人たち＝熊本県益城町で21日午前9時9分、兵藤公治撮影

被災地では、災害ボランティアセンターの設置が進んでいる。益城町でも21日、町内のグラウンドにセンターが開設され、午前9時の受け付け開始前から数十人が列を作った。

2012年の九州北部豪雨で被害が出た福岡県八女市の崇城大4年、中島花奈子さん(21)は、朝から大学の友人と受付のテント前に並んだ。「全国からボランティアが来てくれて助けてもらったのでその恩を返したい」と意気込んだ。高松市の会社員、柳田孝一郎さん(40)は支援物資を車に積んで8時間かけて駆けつけた。「できることがあれば何でもしたい」と話した。

ボランティアたちは、スタッフから「被災家屋の前で記念撮影はやめて」「被災者へ思いやりを持って活動してください」などと説明を受けた後、避難所運営の手伝いや支援物資の仕分けなどの作業に向かった。その後、雨が強まったため午前11時に受け付けを打ち切った。

センターを運営する益城町社会福祉協議会によると、14日の最初の地震直後から開設を目指していたが、16日未明の「本震」で協議会も被災。地元企業のグラウンドを借りることで開設にこぎつけた。毎日午前9時～午後4時、200人程度を受け入れ、被災者から寄せられる要望に応えていく予定だ。町保健福祉センターに避難する会社員の永田博幸さん(51)は「右足が寒く、片付けを手伝ってくれるとありがたい。物資の仕分けなどの人手が増えたら食事の配給などもスムーズに進むと思う」と喜んだ。【佐野格】



2016年4月21日　毎日新聞夕刊　P.1